

第1講「財政を学ぶ意義」

24.8.18

多摩住民自治研究所（目黒重夫）

●はじめに 財政分析を学ぶ意義について少し考えてみたいと思います。私は東京・府中市で28年間議員を経験しました。その間の財政問題の取り組みについて報告し、皆さんの参考になればと思います。

（1）財政分析を学ぶ意義

●議会活動の中で予算・決算議会（審議）は特別重要

- ・首長が予算を編成し議会が議決、首長が提出した決算を議会が認定
- ・2元代表制のもと重要な役割を議会は担っている。
- ・予算・決算書は数字ばかりだが、住民の暮らしと仕事がかかっている。

●議員になって一番戸惑うのが、財政問題

- ・私も2期目ぐらいまでは予・決算委員会が苦痛だった。個別政策の議論はできても財政全体を把握することはできなかった。
- ・財政の学習は新人議員であれば行政から、あるいは各種学習会もある。
- ・しかし数字の羅列と聞き慣れない財政用語、ちょっと講義を受けただけでは、その時は分かったつもりでも、すぐ忘れるのが財政の厄介なところ。
- ・誰もが早く財政に強くなりたいと思うのではないだろうか。

●何のために財政に強くなる必要があるのか

- ・一言でいえば「住民の生活を守り、要求を実現するため」
- ・限られた歳入の中で何を優先させるのか、その必要性和財政的裏付け
- ・そのためには財政の現状・将来など全体像を把握し、行政と対等に議論が必要
- ・それには自分で「財政分析」を行い、身につけることが大事

●「大和田流財政講座」の特徴

- ・「習うより慣れろ」は聴く学習だけでなく、実際に書き込みや計算もすることで、難しい財政学習が分かりやすく楽しいものに
- ・特に財政用語や財政指標の理解につながる
- ・参加者同士の交流など、より実践的な学習
- ・財政講座を契機に地域での「財政白書」づくりへ

●私の受講経験から

- ・2回の財政分析講座と財政白書づくりを通じ、予・決算審議が面白くなった。

- ・特に様々な財政指標のグラフ作成で、自信をもって論戦ができるように。
- ・議会活動だけでなく、市民活動にも生かすことができた。

●議会での取り組み

- ・繰越金一予算では毎年8億円、しかし20億以上が繰り越されていた。
- ・「財源不足→基金枯渇→歳出削減」との論戦
- ・公共施設整備基金、漠然とした積み立てから具体的積み立てへ

(2) 2回の財政分析の取り組みについての紹介

第1弾 **市民が手がけた「府中の財政分析」**(中間報告) (2002年11月)

- ・特徴は財政分析を初めて手掛けた市民が中心
- ・きっかけは2000年の市長選、市政を知るためには財政から。大和田さんを講師に
- ・選挙に関わったメンバー10人ぐらいで始まる(講師・大和田一紘さん)
- ・主に決算カードの見方や財政指標の学習
- ・講座終了後、財政分析第1弾として補助金調べ
- ・主な補助団体の会計報告を情報公開請求
- ・自治会、体育協会、消防団など議会でも取り上げにくいテーマに挑む

●その後10年ぐらいを経て

第2弾 **本格的な「市民が分析した府中市の財政」**(2014年3月、2016年3月)

- ・「中間報告」を出してから10年余が経過—その間に各地で「白書」が次々発刊
- ・正直焦りもあった
- ・きっかけは、府中版「事業仕分け」

●事業仕分けには懐疑的でした。よその人が好き勝手なことを言って、それを理由に補助金を削る、とんでもないと思っていた。しかし実際の仕分けを傍聴して、一口で言って「面白い」と感じた。もちろんすべてがいいとは思いませんが。しかし議会ではなかなか取り上げにくい団体について。小気味よく切り込んでいく。これは部外者じゃないとできない。

●その後、仕分け人と大和田さんを招いたシンポジウムを開催

- ・関心が高く職員、市民、超党派の議員も参加。
- ・再び大和田さんを講師に財政講座(2週間に1回のペースで全10回、毎回20人ぐらいが参加)
- ・講座終了後、本格的な「白書」づくりへ
- ・特徴は学生、市民、議員が共同で作成
- ・市民活動支援補助金の活用
- ・約3年間で歳入編、歳出編の2冊を発刊

●最後に 財政分析は根気と仲間が必要です。目標をもって楽しく続ければ、必ず議会活動に生きてきます。今回の講座をきっかけに、財政分析の取り組みを広げましょう。